加藤周一著作集

8

加藤周一著作集

現代の政治的意味

8 加藤周一著作集

現代の政治的意味

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集8（全15巻）
現代の政治的意味
一九七九年三月二〇日　初版第一刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八一一九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1979　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

I

戦争と文学とに関する断想　5

II

新しき星菫派に就いて　17

或る時一冊の亡命詩集の余白に　27

一九四五年のウェルギリウス　36

焼跡の美学　43

我々も亦、我々のマンドリンを持っている　50

金槐集に就いて　58

知識人の任務　66

オルダス・ハクスリーの回心　72

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

寓話的精神　79

III

天皇制を論ず　93
君よ知るや南の国　109
天皇制について　118
風向きの変化と日本の現実主義　151
中国承認問題　176
中立と安保条約と中国承認　182
精神的失業と不平等の国際化　199
日本という謎の国　226
ドゥ・ゴール体制とは何か　239
明治一〇〇年と戦後二〇年　249

IV

世なおし事はじめ　257
言葉と戦車　286
丁丑公論私記　323
米中接近——感想三つ　340
道義上の問題二つ　351
ヴェトナム・戦争と平和　358
越南自哀文　367
見るべき程の事は見つ　377
天皇について　386
あとがき　391
初出一覧　397

加藤周一著作集　8

現代の政治的意味

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

戦争と文学とに関する断想

戦争と共にジャーナリズムはインテリを攻撃するのに急であった。そして勿論ジャーナリズムの舞台でインテリを攻撃する者はインテリに他ならなかった。――こう云う現象を何と形容すべきか私は知らない。しかしこう云う現象の下らないと同時に喜ぶべき現象であることは明らかである。日本のジャーナリズムが今日位インテリの社会的力を尊重したことはないからだ。

ところが戦争の進展にともない、インテリは「評判に反して」生活への積極性を、従って文化への積極性を示した。のみならずインテリは又「評判に反して」戦場に於ける勇敢な兵士であった。本来の知性と云うものが評判に反することを好むのだから事情已むを得ないし、又「評判に反し」たからと云って何も驚くことはない。

インテリの青白い顔色を軽蔑する流行はジャーナリズムによって普及した、しかしインテリに就いて心配すべきことが顔色の象徴的役割なんかでないことは解り切った話で、心配すべきことは彼等の知性以外にはないのだ。インテリを退治したインテリはインテリの中でも一番下らない

連中である（と云って、念のために附言するが、彼等の下らぬということは彼等の馬鹿とシノニムでないことは勿論だ。今日の時代は下らなさと馬鹿さとが鮮かに分離しはじめた点に於て甚だ特徴的な時代である）。

さて、戦争がインテリを鍛えた、インテリは実に立派で強うございます等と感服していたって何にもならない。つまりこの位不毛な思想はない。日本のインテリが強かったということは、インテリも日本人であり、とにかく或る程度のインテリでもあったと云うことの証拠を出ない。日本人の戦争に強いことは一般的だが、元来知性と云うものは実に力強いものである。力強くなければ評判に反してなどいられるものではない。

が、そんなことよりも我々に大切なことは、戦争が我々の知性や感性や文化やその他総てをひっくるめた我々の人間を鍛えつつある、と云うことの認識である。この際、何が我々を鍛えたかと云うことより、鍛えられつつあると云うことの認識を尊重する一般的教訓を、学ばねばならぬ。戦争にとって必要なものは自然科学と修身であって文学ではない。ヨーロッパを席巻した蒙古勢は浪花節程度の文学をもっていたかどうかさえ怪しいのである。しかし私は戦争と文学との話をこの文学的伝統に恵まれた日本に生れたから誰はばかることなく語ることも出来る。しかし戦争にとって文学が必要でない以上、戦争の側から文学を見たってどうにもならない。そして我々が学ぶべき教訓は、思うに、戦争にとって大切であるのみならず文学にとっても大切なことなのである。

戦争が我々を鍛えつつあると云う認識は、物質的精神的緊張感によって具体性を帯びるが、日本の知性と感性にとってこの緊張を深く感じることだけが最大の課題である。

*

今日程この国の広いインテリ大衆が、事実を知ろうと云う慾求に燃えたったことはない。『麦と兵隊』は戦争の事実を語ったから売れたのである。『ドイツ戦没学生の手紙』が出版され、レマルクRemarqueやドルジュレスDorgelesが再び人々の口に上った。何部隊が何処を占領したと云う新聞記事は無論事実を語っているが、戦争の事実はそれだけではない。戦場の肉体や精神も又戦争の事実であって、国民はそう云うものを知るために戦争文学を読むのである。そしてそう云う事実への関心は読者自身の生活の不安に根ざしている。

大根があがったり円タクが高くなったりするのは即ち生活の不安であるが、しかし本当に不安じゃないので、大根があがっても我々は死なないし、意気は沮喪しない。国民は国家の前途を信じている。従って戦争文学によって戦争の正体を理解しようとする慾求は、生活の不安に根ざしているにはちがいないが、それによってその不安を解消せんがためではない。たとえどんなことを理解しようと大根は安くならないし、又我々の戦争を遂行するためには大根の高いこと位がまんするのが当り前だ、と誰でも心得ているだろう。つまり不安なのは大根の高いことではなくて、大根の高いことの解釈の仕方が定らぬことである。そのために国民は戦争の事実を知ろうとする

のである。そればかりではない。一方において大衆は文学に倫理的な感動を求める。今まで日本のインテリ大衆は個人主義訓練を受けて来たが、個人主義的に訓練された精神は、生活に対して積極的になる時、殊のほか倫理的な感動を愛するものだ。

『若い人』は最近もっとも多く読者を獲得した小説の一つであるが、あれにはモラルがないと云うのが定評であった。そして勿論この定評は正しいのだが、『若い人』のミッションスクールを背景とする女生徒と男女教員との三角関係はもっとも通俗的な意味で、倫理的なものであり、『若い人』を読む多くの読者は小説にモラルがあろうとなかろうと倫理的な感動を受けとるのである。女学校の教員のなかにはあんなけしからん話はないと云って大いに興奮した人々があった位で、察するに『若い人』の人気の秘密はこの辺にあるらしい。そしてこう云う興奮は非常に健康な性質のものである。それが少しく高級化されたものがジード Gide の翻訳小説愛読家の興奮であるだろう。殊に『女の学校』の一連の作品が広くインテリに読まれたのは、その強い倫理的な色彩のせいである。しかし本当は『女の学校』にモラルなんかない、読者は読み終って何のモラルも受けとりやしないのだ。それで読者の満足していることは『若い人』の場合と同様である。何れにもせよ文学に対する大衆の二様の要求は、インテリの生活に対する積極性を物語るものだ。『若い人』と『麦と兵隊』と二つの流行は偶然のとりくみではない。

*

昔源義家にとって伏兵を知らせる為水鳥は甚だ抒情的に飛びたった。と同様にヨーロッパ大戦の塹壕では砲弾がアポリネール Apollinaire にとって花火のようにはねた。戦争の殲滅化はこの種の抒情精神を滅すものではない。のみならずその性格を変えるものでさえない。問題は如何なる詩的伝統が戦争に遭遇するかだ。

今度の戦争で日本軍の塹壕からは色々の文学が生れた。無数の和歌に新体詩と日記文学と。このうちで新体詩は浪花節の詩精神が戦争を唱った場合で、文学としては甚だ低級である。之は何も作った人の責任ではないし、士気を鼓舞するためにはこの方がいいかもしれない。ただ前にも云ったように、戦争にとってはそんなことはどうでもよいのだ。万葉精神も浪花節精神も一視同仁であるが、文学にとってはそうは行かない。文学は万葉を賞讃すると共に須らく浪花節を黙殺しなければならぬ。我々の和歌の伝統が戦争によって如何に見事な成果を生んだかに就いて語らねばならぬ、と云うわけだ。

和歌の伝統は、昔洗煉されて、上流社会のなかにあった。平安朝の貴公子は恋人に思いを明かすにも、歌に託したと云われている。どうだか怪しいものだが、仮にそれが本当だとして、しかも今日の上流社会が歌を忘れてゴルフか何かに凝っているとしても、我々は少しも昔を懐しむことはない。今日の労働者は恋慕の情を歌って恋人に渡す代りに、労働を歌にして雑誌『アララギ』に投稿している。

そして歌に写生を提唱したのは子規であるが、左千夫や赤彦や茂吉や子規の系統をひく『アラ

ラギ』の大歌人たちは、写生を発展させて高級なリアリズムを歌のなかで開拓した（抒情精神はリアリズムと矛盾するものではない）。この精神は『アララギ』の隆盛と共に広くインテリ大衆のなかへ浸透したのである。

*

戦争の和歌が無数の傑作を含んでいる理由は之以外にはない。日本軍の塹壕にいる歌人たちは文学の一番素朴で健康な、「眼」を持っていた。戦争の烈しい緊張を捉えるにはこの心眼以外にはないのである。

火野葦平の『麦と兵隊』に就いてはもう論議が尽されたから云わないが、『糞尿譚』で複雑な人間心理の構造を追究した彼も、戦場では実に単純な人間の感動や緊張を素直に描いている。

塹壕からフィクションは生れないし、又生れる必要もない。塹壕で人は彼等の緊張を記録すりゃいいのだ。戦争は勿論複雑極まるものだが、戦場の緊張感と云うものは、それが緊張の極致であるが故に、恐らく単純なものにちがいない。そして捉える必要のあるのはこの単純さだけなのだ。近代小説の方法は解析的に精密を極める。だからこの単純さを捉えるには適しないなどと云うのは嘘だ。塹壕からフィクションの生れない理由は時間以外にはない。塹壕の知性も感性も時間を信用しないのである。ところが小説はそれ自身の時間を現実に向って主張する。だから人は詩によって時間を超克するか、日記文学によって現実に同化するか——塹壕文学の様式はこの二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo